

学生のレポート作成における現状と改善 —専攻共通科目「日本語表現論」を出発点として—

百留康晴*

Yasuharu HYAKUTOME

The Current Situation and Problems of Report Writing Ability of Students
With “Nihongo Hyogenron” as the Starting Point

要 旨

本稿では言語教育専攻における専攻共通科目「日本語表現論」（1年次後期開講）を担当する中で見えてきた成果と課題、今後の改善の方向性について述べた。各授業時に行っているアンケートの記述から、本授業が授業目的を達成し、身近な日本語に潜む文法への気づき、および日本語を注意深く観察しようとする意欲を喚起することに一定程度効果があることが窺える。しかしここ3年にわたって課したレポート課題の内容からごく一部の学生にレポート作成のための言語能力不足、書式、分量、内容に関してこちらが指定した内容に従うことが出来ない、課題内容に関する理解が不十分である、などの問題点が見られた。このことを受けて行った「日本語学概説」（2年次前期開講）における学生に対するレポート作成指導の取り組みと成果を踏まえ、今後の「日本語表現論」授業改善の方向性として、レポート課題の提出締切の前倒し、授業期間内でレポート内容に関する指導を行うことなどを示した。

【キーワード：日本語表現論，言語能力，レポート作成】

1. はじめに

言語教育専攻では国語教育コース、英語教育コースの学生が共に1年次後期に履修する専攻共通科目として「日英対照言語学」「日本語表現論」「異文化の交流と理解」を設けている。この科目では両コースでの学習内容の基盤となる「言語」「文化」に関する内容を学ぶ。筆者はそのうち「日本語表現論」を担当している。本稿では「日本語表現論」における授業のねらい、目的、概要を紹介した上で授業を担当する中で見えてきた成果と課題、今後の授業改善の方向性について述べる。

本稿は以下の構成を取る。第2節では「日本語表現論」における授業のねらい、目的、概要について使用する教材を含め具体的に述べる。第3節では近年レポート課題を課す中で見えてきた学生の現状と課題について述べる。第4節では国語教育コース主専攻生、副専攻生を対象として2年次前期に開講されている「日本語学概説」において実践した、学生のレポート作成能力向上のための取り組みとその成果について述べる。第5節ではまとめを行い、課題として今後の授業改善における方向性について述べる。

2. 「日本語表現論」の概要と目的

母語話者として接する日本語は外国語とは異なり、当たり前の存在であり、あまりにも自分達と密着しているために意識が及ばず、分析対象とはあまりならない。

「日本語表現論」では日本語表現に関する種々のテーマを取り上げ、あえて日本語への内省力を培うことを目的としている。主に日本語における文法やコミュニケーション上のストラテジーに関係する諸問題を通して形式の異なりによる表現上の違いや対人コミュニケーションのよりよいあり方を論じている。授業では以下のものをテキストとし、その内容を噛み砕いて説明している。

森山卓郎（2002）『表現を味わうための日本語文法』
岩波書店

森山卓郎（2003）『コミュニケーション力をみがく
日本語表現の戦略』日本放送出版協会

授業は講義形式を採るが、授業内で学生に問いかけをし、それに対する回答を出してもらうことで積極的な受講を促している。また毎授業終了時に学生に対してアンケートを行い、授業内容について興味深く感じたことや分らなかったことなどを記入してもらい、学生の理解度や興味のありようを把握することに努め、出された疑問については次回の授業の冒頭でフィードバックすることで解消を図っている。

次に授業内容についてテキストの内容と関連させながら述べる。テキストの著者は執筆時京都教育大学在職の日本語文法研究者であり、テキストは日本語文法、日本語表現法について身近な素材をテーマに一般向けに書かれたものである。授業内容は以下の事項を中心に行っている。

* 鳥根大学教育学部言語文化教育講座

格 時の表現 推量や断定 疑問表現 依頼表現
主語 敬語表現 気配りのある文章

テキストの内容には歌詞（竹内まりや「駅」、やなせたかし「勇気りんりん」、松任谷由美「恋人がサンタクロース」、「ロンドン橋」の歌）、詩（高村光太郎「冬が来た」「ぼろぼろな駝鳥」、阪田寛夫「練習問題」、中原中也「一つのメルヘン」、谷川俊太郎「かなしみ」、俳句（種田山頭火「生き残った虫のひとつは火をめぐる」、）などに含まれる多くの日本語表現が取り上げられているため、学生にも興味を持たせることが出来ているのではないかと考えている。また俳句や詩の表現について文法的な観点から興味深い解釈が示されており、国語科の教材研究を行う際にも参考になる内容が含まれていると考える。

各授業時に行っているアンケート用紙の内容から見ると、身近な日本語に潜む文法の存在への気づき、日本語を注意して観察してみようとする意欲を喚起することに一定程度効果があるように思う。アンケートで寄せられた質問についての補足説明を行うことで授業内容や日本語に関して理解を深められるようにしている。

以下具体的に授業内容の一端について述べる。格は文の中で名詞と述語との意味関係性を表すための文法的概念である。格をめぐる事項に関する授業内容では以下のものを取り上げている。竹内まりや「駅」は駅で2年前に別れた男性を見かけた女性の心情を歌った歌である。「駅」の歌詞には以下の詞が含まれている。

今になってあなたの気持ち
初めてわかるの痛いほど
私だけ愛してたことも

学生に下線部についての解釈を聞くと学生からは以下の2種類の解釈が出される。

「私だけが彼を愛していた」 片思い解釈
「彼は私だけを愛していた」 すれ違い解釈

じつはこの二つの解釈は両方正しい。ただ問題はなぜこのような二つの解釈が同じ文から生まれるのかという点である。その理由を考えさせ、答えさせる。そうすると大抵正解を答える学生がいる。なぜ下線部に二通りの解釈が可能なのか。それは「私だけ」の後に述語「愛してた」との格関係を表す「が」「を」という助詞が示されていないからである。「私だけ」の後に「が」が続けば愛していたのは「私」であり、「を」が続けば愛していたのは「彼」であり、「私」は彼が愛する対象、すなわち目的語ということになる。この詞の下線部では格助詞「が」「を」が省略されているために「私だけが」とも「私だけを」とも解釈できることになり、二通りの解釈が生まれるのである。

こうした名詞と動詞などとの関係を表示するのが格助

詞であり、格助詞には「が」「を」「に」「へ」「から」などがある。これらは文の中の名詞と動詞との関係（格関係）を表す重要な標識であることを伝える。

また高村光太郎の以下の詩「冬が来た」を用いた授業では、下線部の「僕に來い」という表現を取り上げた。

きっぱりと冬が来た
八つ手の白い花も消え
公孫樹の木も箒（ほうき）になつた

きりきりともみ込むやうな冬が来た
人にいやがられる冬
草木に背かれ、虫類に逃げられる冬が来た

冬よ
僕に來い、僕に來い
僕は冬の力、冬は僕の餌食だ
しみ透れ、つきぬけ
火事を出せ、雪で埋めろ
刃物のやうな冬が来た

名詞と動詞の関係で大切なのは格助詞だけではなく、名詞の意味と動詞の関係も重要である。「僕に來い」という表現はそれを示すための例文である。

「～に來る」の文の「～」に入るのはどんな名詞かという地名など基本的に場所を表す名詞である。英語では「Come to me」というように自分を指す代名詞「me」が動詞を受けることが可能であるが、日本語では「僕のところに來い」のように「僕」に「ところ」などを加えて「場所」として言い換える必要がある。これは日本語において、ものが「來る」にはそれだけの場所が必要であり、「僕」というのは人間であって、場所ではないという捉え方を反映している。

このように日本語の文では通常「僕に來る」という表現は使用できない。しかし、「冬が来た」という詩では「僕に來い」という表現がある。このことをどのように考えたらよいのだろうか。「僕に來い」という表現では人間である「僕」があたかも場所であるかのようにずらされていると考えることができる。そのことによってこの詩では「僕」がまるで「冬」の居場所にもなれる何かとてつもなく大きな存在であるかのような印象が生まれている。これは作者によって計算された「違和感」であると言える。

また冒頭の「きっぱりと冬が来た」という表現も取り上げている。「きっぱりと」の使い方を考えてみると、日本語では「きっぱりと断る」「きっぱりと言い切る」のように、だらだらしない、ためらわない、といった人の精神的な態度を表す。「きっぱりと冬が来た」という表現は「きっぱりと」の通常の用法とは異なり、違和感を感じさせる。しかし「きっぱりと」と共に使用することによって「冬が來る」ということにある種の精神性を読み込ませるといった効果を生んでいる。したがってこれ

は広い意味での擬人法の一つと考えることができ、表現として計算されたものと考えられる。

また時の表現をテーマとした授業内容では冒頭に以下の俳句を提示し、Aに分類した俳句とBに分類した俳句との相違点を考えさせる。

A 冬蜂の死にどころなく歩きけり 村上鬼城
山茶花や舞子が通るまた舞子 川崎展宏
桐一葉日当たりながら落ちにけり 高浜虚子

B 奈良七重七堂伽藍八重桜 松尾芭蕉
チューリップ喜びだけを持っている 細見綾子

答えはAは内容に時間の経過があり、動きがある俳句、Bは時間の幅がなく、静止画のように表現されている俳句ということである。このようにマルチメディアで表すとどうなるかという視点から俳句を眺めると動画のような俳句、静止画のような俳句、といった違いが見えてくる。

次に動きか静止画かを決めるものは何かということを考えさせる。これは比較的簡単に答えが出るが、Aの俳句では述語が「歩きけり」「舞子が通る」「落ちにけり」のような「動き」のある動詞になっている。一方、Bの俳句では述語が「八重桜」「持っている」である。「八重桜」は名詞であり、「動き」はない。同様に「持っている」も動詞に「ている」が付いて現在の状態を表す表現であるので「動き」はない。

それでは以下の二つの俳句はAに分類するべきか、Bに分類するべきか、このことを問う。

夏川を越すうれしさよ手にぎょうり 与謝蕪村
赤い椿白い椿と落ちにけり 河東碧梧桐

これについてはAとする者とBとする者と考えが分れる。それは当然で例えば与謝蕪村の「夏川を越すうれしさよ手にぎょうり」という俳句は今から川に入っていくというモーションでも読め、また「今現在」川の中という静止画でも読める俳句でもあるからである。言葉から見ればこの句には「越す」という「動き」を表す動詞があり、さらにそれに「うれしさ」というその時の状態が続いているので、全体を動詞の動きを中心に解釈することもできるし、「うれしさよ」という名詞を中心に解釈することもできるということになるのである。

また河東碧梧桐「赤い椿白い椿と落ちにけり」という句は正岡子規と山口青邨とで「動き」と見るか、静止画と見るかの解釈が分れている。正岡子規は『明治二十九年の俳句界』においてこの句の情景を「之を小幅の油画に写しなば只地上に落ちたる白花の一団と赤花の一団とを並べて画けば則ち足れり」と評した。一方、山口青邨は『明治秀句』において「二つの花が相前後して落ちる情景」と解釈している。このことから正岡子規は静止画と解釈しているのに対し、山口青邨はモーションと解釈

していることが分る。これは「落ちにけり」からどのような情景を思い浮かべるかということにかかっている。「落ちにけり」を「落ちた」と解釈し、椿が落ちた後の情景を考えれば静止画という解釈になるし、「落ちにけり」の「けり」を詠嘆と解釈し、目の前で椿が落ちたと捉えれば「動き」が存在することになる。

日本語では眼前の情景を時間の経過とともに展開するものと捉えるか、そうではなく静止画のように捉えるかは述語の性質の違いによって決まるが、異なる性質を持つ言葉が句の中で使用されている場合はどの言葉に焦点を当てるかによって解釈が分れる。ここに見られる「動き」「状態」は文法的概念であって、全体を「動き」と見るか「状態」と見るかには文法の働きが関わっている。

この授業では以上のように日常に存在する表現やその解釈に潜む文法の存在を指摘するとともに、創作された表現を文法的な見方から解釈することでその表現性が生まれる原理を説明していく。そして知る、覚えるということよりも自分で考え出すことを学生達に促すということを重視している。

3. 「日本語表現論」で課したレポート課題から見た学生の現状と課題

「日本語表現論」では2011年度以降日本語関係の新書等を1冊講読し、その書評を書いてもらうという課題を課している。それは授業内容に関連して日本語関係の新書等を1冊講読することで、日本語の特徴について更なる理解を深め、文章の批判的な読みや自分の考えを論理的に表現する力をも付けてもらいたいと考えたからである。書評の対象となる新書は指定し、以下の文法、語彙、対人コミュニケーションに関するものを中心に選定した。このリストを当初1月に学生達に提示し、課題を予告していたが、2013年度は12月中に提示し、課題を予告した上で出来る者には冬休み中に読むことを勧めた。

1. 金田一春彦『日本語〔新版〕上・下』岩波新書
2. 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書
3. 鈴木孝夫『日本語と外国語』岩波新書
4. 柴田武『日本語はおもしろい』岩波新書
5. 井上史雄『日本語ウォッチング』岩波新書
6. 水谷静夫『曲がり角の日本語』岩波新書
7. 黒川伊保子『日本語はなぜ美しいのか』集英社新書
8. 野口恵子『かなり気がかりな日本語』集英社新書
9. 野口恵子『バカ丁寧化する日本語』光文社新書
10. 加藤重広『その言い方が人を怒らせる』ちくま新書
11. 蒲谷宏『大人の敬語コミュニケーション』ちくま新書
12. 秋月高太郎『ありえない日本語』ちくま新書
13. 小池清治『日本語はどんな言語か』ちくま新書
14. 渡辺実『さすが！日本語』ちくま新書

15. 定延利之『煩惱の文法』ちくま新書
16. 金田一秀穂『「汚い」日本語講座』新潮新書
17. 梶原しげる『すべらない敬語』新潮新書
18. 石黒圭『日本語は空気が決める』光文社新書
19. 荒木博之『日本語が見えると英語も見える』中公新書
20. 森田良行『日本人の発想、日本語の表現』中公新書
21. 荒川洋平『日本語という外国語』講談社現代新書
22. 加賀野井秀一『日本語の復権』講談社現代新書
23. 原沢伊都夫『日本人のための日本語文法入門』講談社現代新書
24. 深澤真紀『思わず使ってしまうおバカな日本語』詳伝社新書
25. 田森育啓『オノマトペ 擬音・擬態語を楽しむ』岩波書店
26. 小野正弘『オノマトペがあるから日本語は楽しい』平凡社新書
27. 寺尾康『言い間違いはどうして起こる?』岩波書店
28. 金水敏『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
29. 野田尚史『なぜ伝わらない、その日本語』岩波書店
30. 小林ミナ『外国語として出会う日本語』岩波書店

レポート課題は当初以下のように示した。

以下の日本語関係の書籍から1冊選び、書評を書く。
書評は内容の紹介、評価等をまとめたものとする。
分量A4、2枚以上(40字×40行)

課した書評の内容は新聞、雑誌等にあるような感想を記すだけのものではなく、内容の紹介と全体、または一部に対する評価を含む構造を持つものを想定した。また評価の根拠となる本文中の箇所を示しつつ論を展開する論理性も期待した。

しかし、そもそも書評とは何かということが分らない学生がいたことから、こちらの要求する内容のイメージを掴んでもらうため学会誌に掲載された書評を印刷して配布した。この課題は内容の評価よりも、冒頭で本の内容を整理し、その後、自らの評価を述べるという文章構成上の型を身に付けてもらうことを意図したものである。

しかしこちらの意図が完全に実現されないところがあったため、さらに2013年度はレポートの述べ方に関する要求をより明示化するためにレポート課題の内容を以下のようなより詳細なものにして示した。

以下の日本語関係の書籍から1冊選び、その内容を熟読した上で、自分なりの感想・評価を述べなさい。論述に当たっては冒頭で対象書籍に関する自分の感想、評価を簡潔に述べ、その後、内容の紹介、評価

できる点、評価できない点、感想等を述べなさい。また感想、評価を述べる際には具体的な本文の内容等に言及しなさい。

提出先：百留研究室

分量：A4(40字×40行)2枚以上

変更之际し、冒頭で全体の内容を簡潔にまとめて示すことを新たに要求した。その意図するところは冒頭で全体の内容を簡潔にまとめ、その後、内容の紹介、評価を述べるというような、読者に内容を分りやすく見せるための文章構成を身に付けてもらうということである。そのような文章構成を身に付けるということは人前で自分の体験や考えを述べる際にも有用であり、特定の科目内容にとらわれない、学生が一般に身に付けるべきものであると考えた。

また、さらに評価上の加点ポイント、減点ポイントを示すことで、レポート作成に当たって推奨すること、してはいけないことを明確化した。予め設けた加点ポイント、減点ポイントは以下のものである。この加点ポイント、減点ポイントを設けることでレポート作成の指針を示したのである。

加点ポイント

- ・自分自身が見つけた日本語の言語現象を例として示しながら論述する。
- ・他の書籍で言及された日本語の言語現象について引用しながら論述する。
- ・他の人に無い独自の考えが根拠と共に示される。

減点ポイント

- ・そのような感想を持つに至った要因、そのような評価を下した根拠が具体的に示されない
- ・冒頭で文章全体の趣旨が簡潔に示されない。
- ・他の文章を引用しているのに引用元が示されない。
- ・誤字脱字が多い。
- ・ことばの使い方を間違える。
- ・です・ます体とだ・である体を混用する。
- ・本文内で対象書籍の書名が示されない。
- ・内容に矛盾が含まれている。

この2013年度における課題内容の変更は2011年度、2012年度に提出されたレポートの内容を踏まえて行ったものである。そこで次にレポート課題の内容から見てきた学生の現状と課題について述べたい。提出されたレポートを見ると大部分の学生がレポートを提出し、内容も特に問題はないが、ごく一部に問題が見られた。

一つは提出しない、提出しても分量が既定の量に達しない学生の問題である。この授業は必修の科目であり、単位の取得は欠かせない。また、レポート課題は一か月以上前に予告し、読む対象を自分で選択させるなど、自己の裁量を大きく設定している。それにも拘らずこのよ

うな状況が生じることについては文章を作成するための言語能力が低いということ、長期的な展望のもと、計画的に勧めることが出来ないということが原因として考えられる。

また提出はしても40字×40行という書式が守れず、A4、2枚以上という分量は守っているが、文字数から判断して分量が規定に達しないと判断される者がいた。その中には1行空きでレポートを作成している者も存在する。このようなことから見えてくるのは文章作成の困難さを書式の変更で乗り切ろうとする安易さ、また分量に関する「A4（40字×40行）2枚以上」という指定のごく一部を満たせば形式に関する全体の基準を満たすことができるのではないかと考える、または期待する浅薄さである。

このような形式的なルールは最低限守られなければならないものであり、課題の公平性にも関わる問題であるのでより厳格に運用していきたいと考える。

内容の面については、一部の者に以下のミスがあった。

- ・新書の書評という課題であるにも関わらず、タイトル、本文に書名が一切出てこない。
- ・取り上げた新書の著者名を他の新書の著者名と混同する。
- ・その内容についてではなく、新書を読んで考えたことを中心に述べている。

これらは通常考えられないミスであり、学生がレポート課題を十分理解できていないか、注意力が散漫であることに起因するものであると考えられる。

以上「日本語表現論」で3年にわたって課したレポート課題での取り組み、そこから見えた学生の現状について述べた。ごく一部の学生とは言え、言語能力の不足している、指定された形式を守ることが出来ない、課題内容に関する理解が不十分である、という実態が見られた。これらのミスは内容に関わる以前のものであり、レポート作成に取り組む姿勢、課題を理解する力そのものが問われるものである。そこで引き続き2014年度前期開講の「日本語学概説」で現状のさらなる把握と改善への取り組みを進めた。

4. 2014年度前期「日本語学概説」でのレポート作成指導の取り組み

2013年度後期の「日本語表現論」で課したレポート内容から一部の学生見えた現状と課題を受けて、2014年度前期開講の「日本語学概説」でも引き続きレポート作成能力を高める取り組みを進めた。以下その取り組みについて述べる。

「日本語学概説」は「音声・音韻」「文法」「語彙」「文字」「敬語」「方言」「言語発達」という内容から成り、日本語の特徴について概説するもので、履修上、国語教育コース主専攻生、副専攻生には必修科目であり、中高

国語科の教員免許状を取得する上でも必修の科目である。本授業では以前から成績評価にあたって「日本語の特徴について考えるところを具体的に述べよ」という内容のレポート課題を課していた。しかし、提出されたレポートには文献の記述を引用し、その内容を受けて自らの意見等をまとめたというものが目立ち、自ら具体的な材料を集め、そこから観察される日本語の特徴について論理的に説明するという態度で作成されたものはごくまれであった。また書式が守られない、分量が1枚半程度と少ない、締切に作成が間に合わないという学生も一部存在した。

この現状の背景を考えると学生がレポート課題から何が要求されているのかが分らないということ、またそのことについては提出前後に具体的に指導しなければならないということが見えてきた。そこで2014年度はレポートを5回に分けて課すことにした。具体的には「音声・音韻」「文法」「語彙」「文字」「敬語」という5つのテーマに関して、各授業内容の終了後、4週間程度置いて締切を設け、作成させることにした。レポート課題、様式、分量、加点基準、減点基準、締切等は以下の通り詳細に記し、それを開講時に示して周知した。

【レポート課題】

「音声・音韻」「文法」「語彙」「文字」「敬語」という5つのテーマに関して、自分なりに課題を設定し、文献を読み進めたり、身の回りの日本語を観察するなどして、課題の答えを導きなさい。

- ・課題解決のためには各テーマに関する授業内容をよく理解することが必要である。そして、授業内容についてさらに詳しく知りたいこと、さらに考えてみたいこと、また、授業では触れられなかった内容について詳しく知りたい、考えたいということを見つけることが大切である。課題解決のためにはネット上の情報に安易に飛びつくのではなく、自分で文献を読んで調べることや身近な日本語を観察することで情報を得ていく。ネット上の情報はレポート内容に入れないようにする。
- ・設定する課題は様々なものが考えられるが、どのような内容にしても「〇〇について調査して解明する」という内容にしてほしい。課題の解決は「〇〇について□□であることが分った」ということになる。
- ・課題解決のために使用した文献は下の方に一覧を示す。

文献の示し方

- 豊田豊子（1979）「発見の「と」」『日本語教育』36
 - 藤井聖子（2008）「「～ないと」「～なきゃ」「～なくちゃ」の文法」長谷川寿一・C. ラマルル・伊藤たかね編『こころと言葉』東京大学出版会
 - 高梨信乃（2010）『評価のモダリティ』くろしお出版
- 引用の仕方は別添資料を参照。

- ・最後に「ふりかえり」をする。レポートの最後に今回の課題解決を通してどのようなことを学ぶことができたのか、何を感じたのか等を自由に書いてほしい。
- ・レポート内容には課題の内容、課題設定の理由、動機、課題解決の内容、参考文献一覧、ふりかえりを含む。全てを満たしていなければ0点、または再提出を求める。

【評価、加点基準、減点基準】

レポート課題、1つ1つは20点満点とする。評価は設定された課題の独自性、課題解決の過程を論述していく際の論理性、内容の妥当性、情報量、思考の深さ等をもとに総合的に行う。また以下の基準によって加点、減点を行う。

加点基準

- ・課題設定、課題解決に際してユニークかつ妥当な見解が見える。 + 5点
- ・自分で収集した言語データをもとに内容を構成している。 + 5点
- ・単に調査して事実を解明するだけでなく、独自の考察をして一定の結論を導き出している。 + 5点
- ・分量が多い。5枚以上。 + 5点
- ・事前に分からないことを質問する。 + 5点

減点基準

- ・書式が守られていない。 - 20点
- ・分量が不足している。 - 20点
- ・レポート内容に含まれるべき、課題の内容、課題設定の理由、動機、課題解決の内容、参考文献一覧、ふりかえりの一部が欠けている。 - 20点
- ・参照した文献名を示さず、他の文章を引用する。 - 20点
- ・参照した文献の文章と、自分の文章とが分けられていない。 - 20点
- ・根拠を示さず主張が展開されている。 - 5点
- ・段落がない。 - 5点
- ・参考文献の示し方に誤りがある。 - 5点
- ・不要な改行がある。 - 3点
- ・具体例がない - 3点
- ・誤字・脱字がある。 1か所につき - 1点

【書式・分量】

書式・分量は以下のものとする。

A4 40字×40行 2枚以上

- ・表紙は付けない。1枚目冒頭にタイトル、学生番号、氏名を記し、一行空けて本文を書くこと。不要な改行は避ける。減点対象とする。3枚目に達していれば分量は満たす。3枚目に達しない場合、2枚目の最後の行まで書くこと。それ以外は分量不足とする。書式、分量は必ず守る。守られていないものは0点とする。

または再提出を求める。

【提出締切】

レポートの提出締切は以下の期日とする。5/26、6/16、7/7、7/24については授業時、7/31については17時までに百留研究室に提出する。早めに出すことはかまわない。締切に提出できなかったものは原則として0点とする。しかし、やむをえない事情がある場合は締切前に相談すること。相談に応じる。

「音声・音韻」5/26 「文法」6/16 「語彙」7/7
「文字」7/24 「敬語」7/31

各レポート課題はそれぞれ20点満点で採点した。そのため5本のレポートに付けられた点数の合計がそのまま授業の課題全体の点数になる。レポートが提出された後は速やかに採点し、コメントを付した上で2週間以内に学生に返却した。これは早く返却しなければ自分のレポートの問題が分からないまま、次のレポート作成を進めることになり、同じ間違いを繰り返す恐れがあるからである。内容に問題がある学生については返却時に指導を加えた。また締切は厳格に守らせ、締切後の提出は認めなかった。提出できなかったレポートの点数は0点とし、再提出を求めることはしなかった。

レポートに付されたコメントを見ることで学生は自らの足りないところを知ることが出来る。また点数を見ると現時点で何点に到達しているか把握することができ、可に達するためにさらに何点取れば良いか、見直しを持ちつつ次のレポートを作成することができる。

内容の評価に関しては単なる調査報告か、論を展開しているかを大きな基準として、展開のプロセス、根拠、論旨の質等を基に秀、優、良、可の基準に照らして18、16、14、12として付けた。ただし根拠を示しつつ持論を展開するという態度が見られればこちらが必ずしも賛同できない論旨であったとしても0点とすることはせず、批判的なコメントを加えた上で50点に相当する10点は与えるようにした。

それは、作成にかかるそれまでの努力や過程は無条件で一定程度評価したいと考えたからである。そうでなければ作成にかかるそれまでの努力や過程までもが否定されることになり、今後レポートの内容を考えようという意欲を失うことにつながりかねない。そうなれば根拠を示しつつ持論を展開するという基本的、かつ重要な態度を養成する機会を失ってしまうことになる。そこであくまでも自分の興味、意志に基づいて一定のルールを守った上で自由に考えることを促すことを重要視した。

本課題では日本語学分野でのレポートを作成する際に前提として当然要求される自分なりに課題を設定すること、自分で文献を読んで調べること、文献を一定のルールに従って示すこと、論理的に自説を展開することなどを出来るだけ網羅し、それが回を重ねるごとに達成されていくことを目指した。

そのために「日本語表現論」での取り組みと同様に加点基準、減点基準を具体的に設定し、点数化した。そのことで本人がしなければならないこと、してはいけないこと、することが望ましいことを具体的に示唆し、レポート内容の改善、また、努力を促す仕組みを構築した。減点基準に示した-20点減点の部分はレポート1回分の点数が0になるという重いものであり、その改善を強く促したものである。このような減点を行った際には、学生に理由を説明した上で再提出を求め、改善を確認した後、-5点と直した。

以上のレポート課題を実施することにより学生の実態について新たに明らかになったことがある。それは40字×40行という書式の設定をすることが出来ない学生が少なからずいるということである。提出されたものの文字数、行数をチェックすると文字数、行数ともに指定したものに出来ない者が数名、文字数は40文字を守れているが、行数が45など異なっている者が少数いた。指導することで改善したが、当人と面談した際、自分の提出したレポートの書式が間違っていることやなぜ指定されたものと違ったのかということが十分認識できていない者が殆どであった。受講者は30名程度であったため、指定された書式の設定自体ができないものが受講者全体の2割程度存在するということが窺える。

「日本語表現論」の課題レポートでは40字×40行という書式を守らなかった者が存在した。しかし「日本語学概説」におけるレポート課題の結果を見るとその全員が枚数を増やすことを意図して作為的に書式を変えたわけではなく、そもそもそのようなことができなかつた者がいたという可能性も背景として考えられる。

また文献の示し方についてもレポート課題で具体的に説明しているにも拘らず、論文タイトルは「」で括る、雑誌名、書籍名は『』で括るといった基本的なことが守れず、例えば「」『』が抜け落ちる、『』で括るべきところを「」で括るといった間違いを繰り返す学生が少なからずいた。同様に引用についても、参照した文献名を示さず、他の文章を引用してはいけないこと、参照した文献の文章と、自分の文章とは分けなければならないことを強調したため、いちいち文献名を挙げるのだが執筆者の名前の一部を間違え、同一の間違いが10か所以上に上るといった現象も出現した。1つ1つを誤字と考えると20点満点のレポートの中で10点以上減点しなければならないことから、同一単語同一箇所の誤字が3つ以上出現した場合、3点減点とした。

他にごくまれに参照した文献の文章と、自分の文章とが分けられていない、参照した文献があることが文章の内容から窺えつつも文献名を示さずに提出されたレポートも存在した。このようなことが起こる背景には、そのことに関する罪の意識が希薄であること、ないしはそうでもしなければレポートが完成できないといった切迫した状況が存在すると考える。このことについても当該学生を呼び、指導を加えた上で再提出を求め、改善を確認した後、-5点と直した。

以上の取り組みから指定されたことをきちんと実行することが出来ない一部の学生の実態が浮かび上がる。その背景として指定されたことの内容や意味を十分理解していない、注意力不足、指定されたことを守ることの重要性を十分認識していない、といった基本的な学習態度に関わる不足が読み取れる。

反面、この取り組みによって以下のことが達成された。

- ・A4、40字×40行という指定された書式にしたがって全員が原稿を書けるようになった。
- ・課題の内容、課題設定の理由、動機、課題解決の内容、参考文献一覧、ふりかえり、という指定された内容をレポートに盛り込むことが出来るようになった。
- ・分量も全員が2枚以上書けるようになった。
- ・指定された示し方にしたがって参考文献を示せるようになった。
- ・他の文献からの引用部分と自分の考えた内容とを分けて書けるようになった。
- ・事前に内容について相談する学生が増えた。
- ・自ら調査した結果を内容に入れる学生が増えた。
- ・多くの分量の文章を書けるようになった。

5回に分けて課したレポートのうち1~2回目のレポートでは書式のミス、レポート内容の不足、参照した文献の文章と、自分の文章とが分けられていない、参考文献の示し方に誤りがあるといった、ミスが目立ち、減点が増えた。しかし、1回1回レポートを細かく添削し、返却時に指導を加えることで、徐々にそのような部分での減点は減っていった。

他に「自分で収集した言語データをもとに内容を構成している」「単に調査して事実を解明するだけでなく、独自の考察をして一定の結論を導き出している。」「分量が多い。5枚以上。」「事前に分らないことを質問する。」といった加点基準を上手に生かすことによって、3回目以降のレポートでは多くの学生の点数は15~20点に向上した。

これらの基準による加点は全体の点数の4分の1に当たる5点である。そのため、減点基準にかかる単純なミスをなくし、加点基準にかかることを行えば、1回毎のレポートの配点20点を上回ることは容易である。大事なことはそのことにいつ気づくか、それを愚直に実行できるかということにかかっている。実行した学生は点数が伸び、結果として秀や優に達することが出来た者もいる。実行できなかった学生は可にとどまった。これは取り組みに対する個々の態度が反映されていると言える。またふりかえりを毎回書かせることで自分の行ったことや得られたことを再確認させることが出来た。

これまで課したレポート課題では内容に関して学生から事前に相談されることはなく、独自に調査を行い、考察されたレポートも殆どなかった。分量もA4、2枚を仕上げるのがやっとという状態であった。しかし、2014

年度の本取り組みでは事前に内容について相談を受け、アドバイスをすることも増えた。また分量についても中には5枚以上の力作を物する者も現れた。1回毎のレポートの分量は最低2枚であるため、5回分提出した者は最低10枚、原稿用紙換算で40枚分以上の文章を書いたことになる。中にはもっと多くの原稿を書き上げたものもある。

このような結果が生まれた要因として、レポート作成に関して、具体的かつ厳格で明確な要求をしたこと、また良いこと、悪いことを明確に示したこと、要求に達しない行為については減点を行うとともに加点基準によってレポート内容を充実させることへのインセンティブを与え、改善を促したこと、個々の興味に基づいて自由にテーマを設定させたことなどが考えられる。1～2回目までのレポートでは前述のとおり基本的な部分にミスが目立ったが、3回目以降のレポートでは多くの学生が課題内容の要求に沿ってレポートを作成できるようになり、形式的にも内容的にも質が向上した。

作成するレポートの内容について事前に教員に相談するということは質の向上につながるため推奨すべき行為である。しかし、それを義務として課したのでは自主的な取り組みを促すことにはならず、本人がそのことの意味や効果を実感することはできない。本取り組みではインセンティブを与えることにより、内容の改善のための事前相談を促すことができ、それを行った学生は得点の向上だけでなく、それに伴う自らのレポート課題の取り組みにおける内容の向上を実感できたと考える。

課題に関して自主的に問題設定を行い、改善のための努力を惜しまないということは大学生であれば通常でなければならない、あるいは自分で工夫して出来るようにしなければならないと考えがちであるが、現実にはレポート課題において指示されたことすら守れない学生は多い。形式的な指示が守れずしてレポート内容の精度を高めることなど及びもつかない。そこで今後それを達成するための技術の習得を促す具体的な指導を行う必要性がより増している。また受身的に授業を聞くということだけが意識され、興味に応じて主体的に学ぶという活動が授業内容に組み込まれていなかったということも大きいと考える。

なおこの取り組みは「日本語学概説」と同時期に開講している「生活語と方言」で課したレポート作成にもより良い影響を与えている。「生活語と方言」では筆者が初めて担当した2009年度から授業内で発表した方言に関する実態調査をまとめるというレポート課題を課している。しかし、2014年度のレポート内容には発表後、追加調査を行い、さらに考察を加えるというそれまで見られなかった行動が見られた。このことは「日本語学概説」での取り組みを経て、学生たちの中で足りないことをさらに探求しようとする意欲が増したということを表していると考えられる。本取り組みによるこのような波及効果を増す仕掛けを今後さらに考えて行く必要があると考える。

5. まとめと課題

本稿では言語教育専攻における専攻共通科目「日本語表現論」の授業概要およびレポート課題を課す中で見えてきた成果と課題、引き続き行った「日本語学概説」でのレポート作成能力改善への取り組みについて述べた。「日本語表現論」においてレポート課題を課す中でごく一部の学生に、レポートを作成するための言語能力の不足、指定された形式を守ることが出来ない、課題内容に関する理解が不十分である、という実態が見られた。

そこで引き続き、その改善をテーマとして2年次前期開講の「日本語学概説」において課したレポート課題において以下のことが達成できた。

- ・A4、40字×40行という指定された書式にしたがって全員が原稿を書けるようになった。
- ・課題の内容、課題設定の理由、動機、課題解決の内容、参考文献一覧、ふりかえり、という指定された内容をレポートに盛り込むことが出来るようになった。
- ・分量も全員が2枚以上書けるようになった。
- ・指定された示し方にしたがって参考文献を示せるようになった。
- ・他の文献からの引用部分と自分の考えた内容とを分けて書けるようになった。
- ・事前に内容について相談する学生が増えた。
- ・自ら調査した結果を内容に入れる学生が増えた。
- ・多くの分量の文章を書けるようになった。

このような結果を生むためには学生個人の意欲に委ねるのではなく、意欲的な取り組みを促す仕組みを教員が整備する必要があるだろう。本取り組みではレポート作成に関して具体的かつ厳格で明確な要求をする、良いこと、悪いことを明確に示す、要求に達しない行為については減点するとともに加点基準によってレポート内容を充実させることへのインセンティブを与え、改善を促す、個々の興味に基づいて自由にテーマを設定させる、などの内容が文章作成の、質、量における改善を生み出したと考える。2014年度後期開講「日本語表現論」ではさらに以下のような方向での授業改善を考えている。

- ①レポート課題の提出締切を冬休み明け第1回目の授業時に設定する。
- ②1月中の授業内容を文章の書き方に関するものにし、添削したレポートを返却しつつ、作文指導を展開する。
- ③レポート課題は従来通り日本語関連の新書の書評とするが、対象書籍を5～10に絞る。

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」に関する言語能力は専門的な知識、技能を身に付けることと並行して身に付けていかなければならない能力である。今後もこの取り組みを続け、学生の言語能力向上に資する取り組みとしていきたい。